
【巻頭言】

看護を語る Talking on Nursing

東邦看護学会 理事長
横井 郁子

縁あって、さまざまな病院看護部の学習会に参加させていただく機会をいただいています。医療現場は常に変化し、看護職が「忙しい！」と言わないことはありません。そのような中でも、学び続けることは必要であり、重要であることをスタッフ誰もが思っているのが看護職であり、教育システムを組織に設けていることを“あたり前”にしていますが、「なぜ、学び続けなければいけないのか」は、その時々で考え、言葉にする必要があるように思います。

なぜ、学び続けるのでしょうか。私なりに考えてみました。その理由の一つに、看護という仕事が一般の方々には特別なものとして見えないからではないかと思いました。たとえば、食事介助の場面です。私服を着て看護師が介助を行っていたとします。家族や介護福祉士ではなく看護師が行っていると誰もが気づくでしょうか。同じように患者のベッドを整えていたとします。清掃業者と間違われませんか。あるベテラン看護部長が転勤先の病院で困惑していました。環境整備は清掃業者に、機能訓練は理学・作業療法士、言語聴覚士たちが担い、入浴や排泄、食事介助には介護福祉士が関わっていました。恵まれているな、と思う一方で「看護師は何をしているのか、他職種から何を期待されているのだろう。看護を熱く語る看護師もいない……」と不安になったそうです。業務整理をする際には「他者に委ねる分、看護はこれを大事にする」と強い信念と行動力が求められたと思います。しかし、その“改革者”が引退してしまうと看護は隠れていき、それと同時に語れなくなっていったようです。機能訓練を含んだ生活援助を担ってきたからこそ見えた患者の身体と生活。その実践を他者に委ねるのであれば、委ねた他者からどう情報を得て看護師としての判断・行動をしていくのか。そして、委ねたからこそできた看護はどんなことで、患者・家族にどんな貢献ができたのだろうか。この看護部長は師長たちと改めて向かい合おうとしていました。

第三者には特別なことには見えない看護があるような気がします。それは油断すると、看護師本人にも見えなくなってしまふもののように思います。だから、先輩たちは常に看護を振り返り、学び続けることが必要だと多方面に発信し、組織に教育部門をつくることに尽力されたのではと、ふと思いました。

今年度から学術集会の抄録集を会誌として発行することとし、年2回学会誌の発行となりました。発表抄録も研究データベースに登録されることが目的です。いまの看護を記録にとどめ、後輩たち、さらには、一般の方々にも看護を伝えてほしいという願いを込めています。ぜひ、活用して多くの方々に看護を語ってください。

平成 29 年 3 月吉日
